

ミリオン巨乳 ハーレムつくす!

million big tits harem sex!



地方での仕事先のホテル。
部屋で飲んでいる莉緒、風花、恵美（恵美はミュージック）。

恵美「風花ってホントに
浴衣でも引き立つ綺麗な体だね〜」

風花「やっやめてよー恵ちゃん」

莉緒「うっふふ私だって負けてないわよお」



恵美「莉緒はこういう所で
見せようとするからモテないんだよ」

莉緒「こういう所で見せるからモテるんじゃないの？」

恵美「隠すほうがそそられるんじゃないの？
まあどつちにしろモテるのは風花だよ
でも風花って悪い男に騙されそうだな」

莉緒「性格良いもんねえ」



恵美「つまらない男に騙されて初めてを奪われそう」

莉緒「ちよつと恵美ちゃん

飲んでないよね？そつちの話ししちやうのの？」

恵美「私は風花の心配をしているの」

莉緒「もー風花ちゃん顔真っ赤じゃないの」
風花「まっ！これは酔っ払っててー！」



恵美「あつ……アタシはもう済ませてるに決まってるじゃない」
風花「わつ……私だけ処女なんですわねえ……」
二人「……………」

莉緒「何よ今の間は」

恵美「だつ……だからさ……今となりの部屋に
プロデューサーいるじゃない？」
莉緒「まっ……まさか夜這い！」

恵美「言い方っ……でもそういう事
変な男よりプロデューサーなら風花だっでいいでしょ
ねっ とっつげきいっつー」

風花「ちよつ…ちよつと待ってよ恵美ちゃん 私は…」
恵美「もう…ういいうのは勢いが大事だから！ねっ！」

莉緒「…でもあの真面目な

プロデューサーくんが素直に応じてくれるかしら」

恵美「ええ〜押しかけたら怒られるかなあ」

莉緒「…こは経験者同士考えましようよ」

恵美「…そう…そうだねっ 経験者同士！」

風花「ううう…帰りたい…」



隣の部屋。

晩酌していたプロデューサーの元に電話が。

「どうした、莉緒？」

「いや、もう一人で飲んでるし、遊びにだって行かないから。」

「恵美も一緒なのか？恵美に飲ませてないよな？」

「おいおい…こんな時間まで一緒に遊んでたらダメだろ…」

「恵美も早く部屋を出なさい」

「仕方ないな…だから遊ばないって。恵美…はやくその部屋を出て寝るんだ俺には監督の責任がだな…」

「莉緒もいい大人なんだから…」

しびしび部屋を出て、恵美たちの部屋に向かうプロデューサー。
だが、ノックをしても誰も出ない。
ノブを回すと、ドアが空いた。中は真っ暗。

「なんだ？おい、誰もいないのか？」

奥へ進んでいくプロデューサー。

薄暗い部屋で、莉緒のシルエットが見える。

「プロデューサー…マッサージしてくれないかな…」

「どこでも…好きなどころをさ…」

「な…！？莉緒…は…はだけて…！」

と、恵美がプロデューサーの後ろから飛び掛かる。

二人はベントウ。

「ちよっ…！…？恵美…！？」

「プロデューサー…！」

「ちよっとおとなしくしててねー！」

「莉緒 押さえてて」

「私が先じゃダメ…？」

「はひひひ…ごめんね〜」

「ちよっ…！…二人共…何を…する気だ…！？」



プロテクターサーの口をぶちかぶるの
ように、莉緒の胸が頬を覆う。

「ふんっ…プロテクターサー…ん…ん…」
「っ…っ…ん…」

んん

んんんん
♡♡♡♡

んんんん

んん…
んん…

「ねえ…プロテクター…脱がせて…」

恵美はTシャツを脱ぎ、
目の前にはブラのホックが。

抗おうとしても、吸い寄せられるように
手が動き、ブラのホックを外す。

「じゃあ、じゃあ…」

脱ぎかけのショーツに手をかけさせる。

ふんふん♡

ふんふん♡

んんん♡

ふんふん♡

「お…おい…まさか…」
「まさかだよ プロデュースの…
大っきくなってるじゃん…」

ショーツを脱がすと
恵美の弾力のある尻が…

「はひひひ〜プロローグ〜サー…おんこ〜ね」

「よ…よろしくねじゃないだろ…お前…
いいわけないし…経験だつて
ないだろ? いいのか?」

ふん…

んぎょ

んぎょ

んぎょ

んぎょ

んぎょ

んぎょ!!

「けっ 経験だつたらあるもんつ
あるよ! 甘く見ないでよね!」

気持ちでは拒否しているつもりだが、ペニスはフル勃起し、まるで拒否できていない。

ましてや、莉緒のいい匂いのする胸の谷間に挟まれ、

あの迫力のある巨乳に顔を挟まれているのだ。

立场上拒否しなければいけないが、体が全く動けなかった。

「二応避妊具くらい持ち歩くのがモテる女のたしなみよねー」

しかし何だか たどたどしい手つきで

避妊具を無理やり

露出させられたペニスに着けられた…。

「じゃあ挿れるよっ？はああうっ……！」
莉緒(うわっすっ……！ほんとに入ってる……！)
「いっ……！ん……！」

ズッ

「……！」
「……！」

「はっ……ん……」
「お……奥まで……余裕だし……！」

ぬち

ぬち

ズッ

ズッ

「……！」
「……！」
「……！」

しかも、俺の顔には
莉緒の女陰が……！」

ギッ

74

結合部から二筋の血が…

「だ…大丈夫か？ 恵美…！」

「だっ！ 大丈夫大丈夫！

ぜーんぜん平気！」

ぬちよ

莉緒(いたそう…)

恵美が明らかに痛そうなの
動きをしているが、
溢れる莉緒の愛液が
顔中に付着する興奮で、
腰を振ってしまう。

ぬち

ぬち

ぬち

ぬち

「あっ…あ…あ…！」
いい感じっ！
プロフェッサー

ぬち

ぬち

ぬち

莉緒「あっプロフェッサーくっ
すごいブルブルしてる…！
そんなに気持ちいいんだ…！
あっ…！」

「……………」

「あああープロフェッサー
……んあー……んあー……
気持ちよくなっ……」

あーん
あーん
あーん

ゴダゴダ!

「……射精……」
莉緒「す……恵美ちゃん」

んんん

「……気持ちよ……」
「……んんん……」
「……んんん……」

ゴダゴダ!

「にやはは しちやつたね プロデューサー…」

「す…すまん恵美っ…！興奮しすぎて…」

「ああんっプロデューサーくんっ！ああんっ！」

俺は抜かぬまま、腰をすぐに振り始めてしまう。

莉緒の女陰は酸味もあるが
フルーツのように甘く、なにより
陰唇のぬるぬるして弾力のある感触が
まさに果肉を味わうようだった。

べちゃ
ぬちよ

ぬちよ

ドゴッ!

ドゴッ

キ4…

「あああっプロデューサーっ…
いいよ…もっとしよっ…
もっど気持ちよくなるっ」

「舐めでえ…もっど舐めて
プロデューサーくんっ」

んんん
もっどもっど

んんん



結局この体勢のまま、

俺は莉緒の女陰を思う存分舐めながら、

抜かずに恵美の膣でさらに2回も射精してしまった。

恵美はまだ痛そうだったが、何度も絶頂した……。

ペニスを抜くと、精液でタプタプになったコンドーム。

そして破瓜の証拠であろう血。

恵美は絶頂のまま、ベッドに倒れ込む。

「次は私の番ね…」

「お…おい…莉緒…莉緒もやるのかっ!?!」

莉緒の愛液まみれでなんとも女のいい匂いにまみれた俺の顔を見つめて言う。

「そのために呼んだんだもん」

「莉緒も…いいのか!?!」

「プロデューサーくんだもん…悪いわけないわ」

恵美とのセックスの快感がまだ抜けきってない。体が動かない。莉緒は俺にキスをする。

またしても逃げられなくなってしまうた!

あああっ...!!

「はああああ...ううう...」

「おおおおおおお...！ 莉緒...」

「あ...プロデュース...中...」

「莉緒...ああ...感じ...」

「莉緒...！ 痛くないか...？」

「わっ...私初めてじゃないから...」

「んっ...！ こんない女が」

「初めてな訳ないっ...でしょ...」



ズググ

グググ!!

くっくっくっ!!



「ちょっとさあ
アタシ抜きとかないんじゃないの？」
こんどは恵美が女陰を差し出してきた…！」

「あっプロデューサーくんっ
気持ちいいよっ…ひとっこになってる…！
私とプロデューサーくん…！
気持ちいいよ…！」

「莉緒っ…はあっはあっ…
むっ…莉緒…！」

莉緒だけでも気持ちいいのに、恵美の蜜まで…！
「あっ…あっあっ…プロデューサーくん…！」
「莉緒っ…おおお…！駄目だ…出る…！」



おぼろっ!!

あはっ♡

「はあっ…あ…あ…あ…!」
プロデューサー
くんっ…あ…!」
「莉緒っ! 莉緒!」

「あんっ…! すげっ… 莉緒も…
プロデューサーも感じまくってる…!」

「ああっ…あんっ…!」
「あはっ…あはっ…あはっ…!」

「莉緒っ…!」

ドッ!

ビッ!

ビッ!

ビッ!



もちろん、射精後も腰が止まることはなかった。
仲良くしているアイドルとの禁忌の背徳、
しかしその分大きくなる感動。

「プロデューサーくんっ…もっ…もっ…もっ…
もっ…気持ちよくなりたいな…覚悟はいい…？」
「莉緒…！…気持ちいいぞお…莉緒っ！」
「ああんっ プロデューサー舐めるのすっ…！」
「へっ…気持ちいいっ…」

恵美の味はジューシーで酸っぱいが陰唇の弾力が強く、
舐める度に弾き返されるような、舐めごたえのある女陰だ。
「莉緒…恵美…！…あぁあぁあぁ…！」



んっ

レロレロ
レロレロ
レロレロ

あぁあぁ

あぁあぁ

あぁあぁ

あぁあぁ

あぁあぁ

あぁあぁ

んっ

んっ

あぁあぁ

あぁあぁ

あぁあぁ

とんでもないことになってしまった。

がこの快樂の渦から

逃れることは到底出来そうにない。

恵美の時のように莉緒と続けて

更に2回セックスしてしまう…

莉緒「…つてえ！本当の目的はこれじゃなかった！
普通に楽しんじゃったわ…！」

おもむろに立ち上がって、莉緒が恵美を起す。

「あっ！そうだった

そうだったよ！風花！」

「風花！？」

「プロデューサーをその気に

させたなら風花を呼ばないと！」

言うと、二人はクローゼットへ向かい、

その扉を開ける。

ガキヤ...

「.....」

「風花ーずいそとみーじー？」

「ぶ...プロデューサーさん...」

「風花大丈夫っ！？もらして...っ！？」
「違っわ...風花ちゃん...すい...濡れてる...」

じとっ

「こういうの見るのなんて初めてでっ...
二人とも何だかすごいしっ...！
男の人の裸も全然見たことなかつて...」

風花はぐしよぐしよに濡れた股間を押さえている。

「準備はできてそうだけど…風花大丈夫？」

「なんかごめん…無理に誘っっちゃって」

「ごめんね風花ちゃん…やっぱやめる？」

「それはっ…！たしかにプロデューサーさんとなら

してもいい気持ちだったのであるし…

してみたい気持ちもありますっ！

でも…しちやいけない関係だとも思います…！

私…素敵なアイドルってファンを裏切らない

アイドルだと思っんです…

だから本当はしちやダメだと思っ…」

「…でもっ 自分で気づいたんですけど…今の私…すごく

セクシーになっっているっていうか…

今までにないくらい色っぽく自分でも感じるんです…」

「いつもセクシーな仕事させられがちですけど…今の自分ならいつも以上にいい仕事ができそうっていうか…」

今の状態をきっかけに良い意味で更にセクシーに変われそうかなって…！」

「それに…体がおかしいんです…」

二人の正ツチを見ながら…

何回も…その…イってしまっ…

私の体が…うずいて…

うずいて仕方ないんです…

これじゃあ眠れないし…

しばらく仕事も集中できないかも…！」

びく

びく

うざ

うざ

「もし抱かれることで解消されるなら…

私がよりセクシーになれるなら…

良いアイドルになれるなら…

本当は清纯が良いですけど…

私が素敵な女の子になれるなら…!」

風花のショーツからは愛液の雫が滴り落ちていた。

いっしょ…

「莉緒さんや恵美ちゃんが言ってる事もわかるし…!

1回だけで良いんです…抱いて下さい…

プロデューサーさん…!!」

もう…わからなくなってしまうて…

でも…抱いてもらえればきつと…!」

「駄目だ…駄目だ風花…! 駄目だ…!」

言いながらも、俺は完全に勃起してしまっていた。

はあ

はあ

「すまん二人共…風花も…すまん…

こんなことをしてしまつのは俺の責任だ…全部責任は持つ…

だが…今は…本当にすまん！」

こちらとしても理性の働く余裕がなかつた。

完全に性欲に支配され、目の前には目も虚ろ、

しかし体は絶頂の繰り返しで火照り、

ますます色気を放つ

豊川風花が抱いてくれと言っているのだ。

「風花…風花の気持ちにはわかつた

一度だけ…抱かせてくれ…！…！…！」

あーっ

ちゅぽん

ちゅぽん

ちゅぽん

ちゅぽん

ちゅぽん

あーっ
あーっ
あーっ

「プロデューサーさんっ……！
あつ……あ……！こんなの……！
こんなな気持ちいいなんて……
これがつ……ああ……セックスっ……！
プロデューサーさんとの……っ」

「乳首弱点なんだプロデューサーくん？
あとさ 知ってるでしょう？私の舌……器用なのよ
セクシーテクニクで……ねっっ」
「プロデューサーも風花も
すっごく気持ちよみそっしゅっさ」

「風花っ……すっしゅっ……
すっしゅっ……！熱めねえっ……！
そっしゅっ……！
感触はやわらかいのっ
全体的な締めがっ……！」

「風花っ……風花……！
出る……！あ……！あ……！
「はあっ……プロデューサーさんっ……！
私たちひとつになつて……ああああっ……！」



「あぁっ……あ……あっ！
あ……あぁあぁっ！」

「風花っ……風花……あぁあぁあぁ！
「はっ……あ……あぁあ……！
感じますっ……プロデューサーさんが
気持ちよくなっているのをっ……！」

「うっ……うっ……おっ……おっ……
なんて締め付けだっ……あぁ……
気持ちよすぎだっ……おっ……
甘い……甘い……射精の快感が甘い！」

あぁあぁ！

ドッ！

ドッ！

ドッ！

あぁ♡ あぁ♡



アハハハ
アハハハ
アハハハ

だが…風花も自分も1回では
おさまっていなかった。
どちらともなく無意識に
腰が動いてしまっていた。

「んっ…
ふたりともすっごいなく…
ずっと我慢してたのかな」

「風花ちゃんすっごいわね…
とんでもない色気よ…」
「フェロモン
溢れまくって腰が勝手に動いてた」

たぶん

たぶん

ゆはん
ゆはん

あま
あま

「すまん風花っ…まだ…
あまりにもセックスの
快感が甘くて2回では…」

「ああっ…はしたない…
恥ずかしいですっ…
私もどうして腰が勝手に…」



結局その後、風花とも

2回たつぷりセックスを繰り返した。

火照った体が静まらず、

内に眠った性欲を爆発させるように

風花は乱れ続けた…。

風花は、放心状態で、普段なら絶対しないような下品な下に股で仰向けになっている。

まだ快感が抜けきっていないらしい。

「まだいけるよね？」

セックスを終えたばかりのペニスに舌を這わせる恵美。そして莉緒も。

ちろっ...

しっ

びん びん!!

「なにっ...!?」

「私たち忘れないでよね? プロデューサーくん」

「おおおおっ……！」

「にひひく敏感になってるの?」
美女二人に同時に舐められるとは……!

「じ……じうやって……ふ……」

袋のほうから……

舐めあげるのとか……

いいんじゃないの……?

いいでしょう? モニエうでしよ?」

「あっ……あ……恵美……莉緒……！」

そして数十分舐め
続けられ……俺はついこ……

ピクッ

ロッ

ロ
ロ♡
ロ

ト
ロ♡
セ
カ
ポ
♡

へいへい!

あまりの快感で、
気がついたら射精していた。
しかも、自分のプロデュース
しているアイドルの
大事な顔に……!

「わぶっ!?
プロデューサー!?」

「ああんっ……
プロデューサーくんっ……!」
「ああああっーダメだっ……!
「あいらなっっー寝持なめおれっ……!」

ドッ!

ドッ!!
ドッ!!

ドッ!



「あああ…すまん莉緒…恵美…！」

「いいよいいよ拭けばいいし
プロデューサーのだったら
嫌じゃないしね
にしてもチヨ
出てんじゃん濃いやつ…」

「マジでちゃんんと舐めて
飲んじゃうのが
いい女じゃないかしら…」

「抜かりないな…莉緒…」

「莉緒くそれって
やりすぎで引かれる
パターンじゃない？」



「うてかさー莉緒ってば処女だったんでしょ」

「恵美ちゃんこそどうなのよ 私は違うわよ…」

「処女だったらこんなエッチなことできないでしょ…?」

そう言うと、莉緒は形よく大きな
ヒップをこちらに向けてきた。

莉緒は身長169センチと

上背があるので体に迫力がある。

そしてヒップと、露になって

愛液にまみれた女性器を俺の顔に…!!

「むぐっ……おっおいつ 莉緒……！」
「ひゃあゝやるねえ莉緒
アタシだつて負けないよ」

ぬるっと熱い愛液の感触と、
やわらかくふにふにしてる大陰唇、
△ニムニトトロトロと独特な小陰唇の感触。

お互い違う女性器の感触が、
甘く生っぽい匂いと共に俺の頬に。

「ム……ム……？トロトロサーくん……
経験豊富な女でしょ？私……」

ガク
ガク

ムム

ガク
ガク

ピクッ

ピク!

ピク!!

が、なんとそこに風花も…！
「何か…お酒と気持ちいいの…
変なスイッチ入っちゃったみたいです…」

3人のやわらかく発情した
トロトロの甘い女陰が同時に顔に…！

「私もプロデューサーさんを…
気持ちよくさせたいです…」

「あぁっ…風花…恵美…莉緒…！」



3人がそれぞれの性器を押し付けて、
俺の顔はまざりあった3人の愛液まみれに。

甘く、そしてスケベな匂いが混ざりあって、
幸福感と淫猥感が飽和状態だった。
確実に死ぬ前に走馬灯に出てくる。

「プロデューサー……どう……？」

3人のどれが「一番良い……？」

「私よね？風花ちゃんにサイズは
負けるけど「一番大人でいいでしょ……？」

「プロデューサーさん……あっ……ああ……
おっ……おちんちん……私の胸に挟まれて
まだビクビクひてますう……」

「ああ……3人とも……
すげえ……ちがちなね……!!!」



「あーっ……プロデューサーさんっ……すっごい……！」

「あっ……プロデューサーさんっ……すっごい……！
ビクビクして……どうでも……かたいっ……！」

風花の胸に挟まれているのと、
3人のマン圧の興奮で、とても
快感を耐えられるものではない。

「んっ……私……私も我慢できなくなってきたわ……！」



(おおおおおおおおおっ……！
すごい光景だっ……！……！)

ぜあっ……

莉緒は俺の頬から腰を離すと、
そのまま女性器を
見せつけるようにする。

(莉緒のおまんこは
とにかく綺麗だ……
莉緒のモデルのような
容姿そのままだ。
桜のようなピンク色で
艶めかしいが
整ってておまんこ
芸術品のようにだ……)

おっ

おっ……♡

おっ♡

「ほらほら……プロキティサーベント……
もう我慢できないうでっよ……
誰に挿れたいの……？ 私よね……？」

「莉緒くそんなの
したら引くつて〜」

「しよ…処女じゃないんだから
「うんうんおめでとうよー」」

（恵美のは全体的に小さめで
陰唇や陰核も小さめだし
事実挿入時もキツかったが
小陰唇のヒダが広くて
いやらしく艶めかし〜…）

莉緒はぎこちなく尻を振る。
恵美もそれに付き合うようにする。

「プっ…プロデューサーさん…っ！」
そして風花も尻を振るように…！

フイ♡

フ

がが

が

が♡

わん

わん

「モテる女は「ねえ」
当然やるはずよー!」
「風花お尻もやっぱすいらね…!」

「ふ…風花…これは
仕事じゃないんだから
こんな恥ずかしい格好
無理しなくても良いんだぞ…」

「ふ…プロデューサーさんだけに
見せるなら…はあつ…むしろ…
見てもらいたいです…」

「んん〜言うねえ風花あ
プロデューサーのアン」
反応しちゃってるよ「よ」

「…だが…風花のあそこは
小陰唇が大きく色こそ色素沈着している
ものの腫自体は綺麗なピンク色で…
どしりとどしりと風花の胸のキレた
迫力があって素晴らしいです…!」

442

442

442

442

442

442

「さあっプロデューサーくん…
アイドル3人の…
誰のがいいの…?」

むちむち♡

「プロデューサー
アタシまたしたいなあ〜」

「はっ…はあっ…!!
プロデューサーさん…!!」

それぞれの愛液が垂れ、
それぞれの女陰の匂いが
溢れるこの密な空間…!!
フル勃起の気持ちの赴くまま、
俺が選んだのは…

むち

むち♡

むち

むち♡

「はあああううー?」
「はああ…あう…」
風花の中う…」
おしりっ…!」

ずんげん!

身長162センチ。
ヒップのサイズ90センチ!
目の前にすると
やはりものすごい迫力だった。

「あああつ…プロデューサーさんっ…!!
気持ちいいっ…!」
「あらら…風花ちゃんを選んだのね…」
「にやはは! 負けちゃったね、
ウチら押しが強すぎたかな?」

「でもじいとなんて
してらねないわよね…?」

莉緒と恵美はそのままWで乳首を…

ちゅんちゅん

あふっ♡♡

ゆげん

ひ

ほほ

「おおおおおー!?!」

プロデューサーくん
乳首弱点よね わかつちやった

私のセクシーテクニクで…
サービスしてあげるわよ!

はははは!

「Know!」

「ん〜アタシは
ちゅっちゅしたげよっかなー」

風花の、きつい肉厚で
ふんわりとやさしい膣と、
二人のW乳首舐めで興奮はMAXに…

「お…お…お…」

「お…お…お…」

「はああっ…プロデューサーさんっ…」

お…お…お…

たっぱん

たっぱん

たっぱん

たっぱん





「風花…止まらないよ…風花…！」

「フロデューサーさんっ…！
すぐに突くなんてっ…！
いじわるしないでください…！」

でもああ…私も気持ちいいですう…
まだ…まだまだしててくださいっ…！
お願いしますっ…！」

「恵美ちゃん…」

「私たちまだおあずけかしらっ！」

「まあ風花が気持ちよさそうだから
いいけどさあ、ウチらの事忘れないでよっ！」

「風花っ…風花…風花ああああ」
「フロデューサーさんっ…」
私嬉しくて胸がいつぱいですっ…！」

ずんずん

ずんずん♡

ずんずん♡

41

41

31

ばゅん♡

ばるん

ばっん

あ♡あ♡

あ♡

いつの間にか夜が明け、ホテルの部屋には日差しが。

『もう朝じゃん！…』

つていうかプロデューサー！

まさか露天風呂貸し切ってるの？」

「あ…ああ…だが俺が希望したんじゃないぞ

ホテルに来たら貸し切られてたんだ

イベントの担当の人がサービスでつて…

気を使ってもらつて悪いから断ったんだが…」

「ええーじやあ入んないと勿体無いじゃん！
せつかくだから使おうよー！」

「いいのか？今日は3人ともオフで観光を…！」

「プロデューサーくんは…！」

休むつもりがある

ようには見えないけど？」

「……」

相変わらず美女3人に囲まれて、

ペニスが天を突いたままだった…。

美女3人の裸を前に

萎えるほうが無理なのだ…。

今度は女性器でなく、おっぱいが俺の顔を圧した。

「はあ……う……う……おっぱいで息が出来ない……！幸せすぎる……！」

「私おっぱい戦力84よおプロデューサーくん！」

「それ言ったらアタシ88なんだけど風花は？」

「わわっ……私は……93……です……」
「うっ……臺穴掘ったわ……でも形のよさでは負けてないのよ！」

「はあ……はあ……」

3人のおっぱいから香る甘い匂いと、莉緒の膣内の気持ちよさに、
会話がほとんど俺の頭に入っていない。



俺は呼吸をしようとする
莉緒たちの吐息を吸うことになり、
おっぱいに顔を戻すと
おっぱいの匂いを吸うことになり、
幸福だが窒息しそうだった。

「ほらほらプロテューサー
気持ちいい？」
蠢く巨乳と、莉緒の膣。

「あ…あ…プロテューサーくん…
どう…どう…うちの戦力も
…あ…あ…あ…私…」

今日はドン引きされたっていうわ…
頑張つて腰振るから…」

「あ…莉緒…あ…あ…あ…
あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…
あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…
あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…あ…」



ズル
ズル

プ
プ
プ

70

90

400

740

740

「ああんっ！」

プロデューサーくんっ……！

ああっ……あ……あ……！

おっぱいで私達の愛の大きさを
感じ取ってよね……！

ドビュッ！

ムキムキッ！

アッ！

ドビュッ！

ドビュッ！

「おおおおっ……！幸せだ……！
おっぱいに挟まれながら……！」
「へへへ押し付けちゃおう」

「恵美ちゃんも莉緒さんも
おっぱいすごく気持ちいい……
プロデューサーさん……
このふかふかで
癒やされてくださいいね……！」

「ちゅとマタシの番？
よーし、プロデューサー、
いっぱいサービスしたげるねっ！」

「ウフフ…もうこんな
天気の良いとき
昼からエッチしてるなんてねっ」

「ごめんね恵美ちゃん
二人きりにしてあげた方が
いいのかもしれないのに…！」

「お姉さん二人で
混ぜうちやつでキスしちゃって…！」

「いいのいいの
細かいこと気にしない！
一緒に楽しもー！」



言いながらの4Pの体勢はスゴく、俺の顔を舐める舐める。

3人の甘い舌が顔中を這い、とろけてしまいそうだ。

「はあ甘いし気持ちいい……
ああああ……恵美……ああ恵美……」

「おおプロデューサーさあ
気持ちいいところわかり易すぎく
こうするのいいんでしょう？ハイ、ギョッッ！」
恵美の膣が締まる。

「おお……おお……ああああ恵美……」
「もっと気持ちよくなつてえプロデューサーの
気持ちいい顔見るのすごく好きかも
フッフッ 照れちゃってえカワイイっ♪」

ズボ
ズボ
ズボッ！

「えへへ ありがとプロデューサー」

まだ腰が止まらない。

「恵美っ……！」

「プロデューサーおはよう
めっちゃ気持ちいいじゃない？」

「あ……あめ恵美！ん……」
「アハ プロデューサーって
やっぱりカワイイねっマ」



しゅわわ

ハア

ハア

しゅわわ

しゅわわ

がく

がく

ぬふ

ぬふ

温泉から上がった4人。

「湯上がり美人に見とれちゃうのでしょプロデューサーくん」
だが、ゴゴゴで…

「あれ？もう無くない？」

コンドームがゴゴゴで数が切れてしまった。

「ゴゴゴ…ゴゴゴ…ゴゴゴ…ゴゴゴ…ゴゴゴ…ゴゴゴ…ゴゴゴ…ゴゴゴ…ゴゴゴ…ゴゴゴ…」

「アタシ買いに行こっか？」

「さすがにアイドルが避妊具を

買いにいったらまずいんじゃないでしょうか…？」

「それに地方行ってるアイドルのプロデューサーも

コンドーム買ってホテルに戻ったらなんかまずいんじゃない？

週刊誌とか張られてたらどうするの？」

ビュッ

「あっ……!? 恵美……!
気持ちいい……っ……」
「へへへ入っちゃったあ……
んっ……プロデューサーの……
きこるっ……」

んあ

あ……♡

フッ

フッ

フッ

生で味わう恵美の体……
熱い。ただでさえ風呂上がりで熱いのに、
生の感触がいつそう興奮を増す。

「まずい……じんの……凄すぎて……!
気持ちよすぎる……!」

「そんなに気持ちいい……?
いっぱい気持ちよくなつてよね!
プロデューサー……へへっ」

ガッ
ガッ

しばらく時間が経ち…
「やばいっ…恵美…さすがに中は…」
「もおゝ大丈夫だってばプロデューサー」
「アタシはプロデューサーに
気持ちよくなつて欲しいんだよ…?」

「プロデューサーさんっ…
気持ちよきさう…」
「プロデューサーへん…
どうしようもない…」

パン
パン

「プロデューサー…んんんん
気持ちいいっ…気持ちいいよおっ」
「ああああ…恵美っ…」
「やばいっ…気持ちよおおお…」

ドッ
ドッ
ドッ

あ
あ
あ

「プロデューサーっ…はあっ…
あ…やほっ…いっせきせき…
あっ…気持ちいいっ…あああああっ…
「EEN…恵美…EEN…恵美っ…あああああっ…」



ゴ
ズル
ルッ!

ゴ
ゴッ!

「んっ……あ……プロデュース……」
「あ……あ……あ……」
「あ……熱いの……中……」
「恵美……む……ん……」
「んっ……あ……プロデュース……」

あはははははっ♡♡♡♡

ビッ
ビッ!!

「あ……あ……あ……」
「あ……熱いの……中……」
「恵美……む……ん……」
「んっ……あ……プロデュース……」

ゴ
ゴッ!



ビュル..
ビュル

コッ..
コッ

はあ
はあ

「恵美…すまん…出してしまった…」
「いいのいいの大丈夫だって
気持ちよかったよお…」

あっ♡ あっ♡

あっ♡

びく

「はあ…はあ…いけならいけどだが…
気持ちよかった…」
「いひひのアタシもあ〜」

「次は私よおプロテクターさん」
「り…莉緒…」

びく♡

「はあっ莉緒っ…まさか
莉緒とも生でしてしまっとは…」
莉緒とキスをして、腰を振る…。
「気持ちいい？」
プロデューサーくん…」

「莉緒…外に抜いて出すから…」
「優しいのねプロデューサーくん
でも大丈夫よ…
受け止めさせて…」

169cmある莉緒の大きな体は、
こちらを包み込みようだ。

「キスがトコ足を俺の腰に」
「掛けるのはやりすぎじゃ」
「あら？積極的な女って
セクシーじゃない？ドーンでしょ？」

しばらくお互い快感を
味わいながら、いよいよ…
「あっ…気持ちいい…」
莉緒…俺は…」

「ねえ…気持ちいいわね
プロデューサーくん…」

うふふ 何も言わなくていいわよ…
今は…ただ気持ちよくなって…
私と…気持ちよくなるからね…」

フワッ! フワッ!
フワッ! フワッ!

ずぶっ!

ずぶ!

ずぶ!

フワッ!

フワッ!

ムニ

ムニ

たっぴん!

たっぴん!

たっぴん!

たっぴん!

「…ずずずずずず…」
「…ずずずずずず…」
「…ずずずずずず…」
「…ずずずずずず…」
「…ずずずずずず…」

「莉緒…はあああ…」
莉緒…だめだ…
やっぱり…技かないと…」
「ヨッホップロデューサーくん…」

「はあはあはあ……うう……
あ……まだ出て……
すまん莉緒……」

「いいのよ……気持ちいいわよ
プロデューサーくん？
莉緒姉さんにもいって
甘えていいのよ」

「莉緒……莉緒……
ああ……気持ちいい……」

「はあ……うう……
あったかいの……中……」



莉緒の胸に顔をうずめると
何ともいい気持ちに……

俺は出した後もしばらく
胸に顔を埋めたまま
抱き合ってしまった。

「り…莉緒まで中に…」

「もおゝ大丈夫だからっ

プロデューサーくんを

もっと近くに感じれて嬉しかったわよ」

「莉緒…」

「じゃあ最後は…ねっ？風花ちゃん」

莉緒は風花に目配せする。

ベッドから降りて、恵美が寝ているベッドへ

莉緒も倒れ込む。

「私も少し横になるわねえ」

もじもじと裸の風花がこちらのベッドへ…。

「あ…あの…プロデューサーさん…」

「風花…」

「プロデューサーさんっ 私…」

もはや聞くのは野暮なのだろう。

目で合図すると、風花はうなずく。

俺はそのまま風花に体を預け、

濡れきった女陰に生で挿入する…。

「プロデューサーさん…」
「風花…いいの…生で…」

「はい…プロデューサーさんの全部…
受け止めますから…」

いん…♡

いん…♡

いん…♡

4%♡

4%♡

4%♡

4%♡

「風花っ…風花…一緒に…
気持ちよくなるうな…」
「はいっ…プロデューサーさんっ…
もう気持ちいいですっ…!」

風花のおっぱいが柔らかくて
弾力があってとにかくエロい。

ドク!
降!

ドク!

「風花…あぁっ…風花…
風花の体…気持ちいいぞ…」

「プロデューサーさんも…
男らしくって素敵ですう…」

「風花っ…もうっ…出る…
出る…風花の…中っ…あ…」

はっ
はっ
あっ

ふんっ

ふんっ

ふんっ

ふんっ

「プロデューサーさんっ…
出して下さい…大丈夫ですから…あ…」

「風花っ…出すぞっ…風花…
出すぞ…！…おおおおっ！」

「プロデューサーさんっ…
出してっ…あ…あああ！」

風花の豊かなおっぱいを
揉みまくりながら、ついに…

ふんっ

ドク!

降!

ドク!

ふんっ



「んんっ！んんっ！
んんっ！んんっ！」
「んぐっ！風花っ！
んぐっ……ん……！」



「んんっ！」
「んんっ！」



「んううう……！」
「プロデューサーさん……ん……！」
「風花あ……んううう……う……！」

「ドクドク！」

「ドクドク！」
「ドクドク！」
「ドクドク！」

キスでお互いの唇を塞ぎながら、
思いつき風花の子宮に
射精してしまう。





「おっ…おっおっおっおっ…
お…風花っ…！めめめめめめ…
あ…気持ちいい…！」

「プロデューサーさんっ…んっ…
熱いっ…あ…気持ちいいですっ…
あ…あああああ！」

まだ射精が続いている。

「風花…あああ…おっおっお…
風花…！あ…風花…」

「はっ…あ…！あああああっ！
幸せ…幸せですうう…
プロデューサーさんっ…！」
ありったけの精液を、残らず
全部子宮に注ぎ、満たしてしまっただ…。

そして気がつくのと夕方近くになるうとしていた…
長い長い一日半が終わった。

「まあさ、ちちゃんと対処しとくから
安心してよー！プロデューサー」

「…あ…あ…あ…頼むん…」

あー！これは秘密！…

しないな…お互に…」

「うひひひ〜どうかしらね〜？」

「莉緒さんってばー！」

「冗談よ冗談っ当然じゃな〜い♪」

「すまなかつた…だが…」

「わからずもよろしく頼む…」

「暗いよプロデューサー」

そんなに気にしなくていいからー！

「とにかく、気持ちよかつたしねえ〜♪」

「うん、気持ちよかつたよね！」

「私も気持ちよかつたです…」

「それは…俺もだ」

「よーしじや温泉巡りに行きますよー」

「さーんさーいー」

「私も色々行って見たかったです」

みんな元気だな…

この一夜のことはまるで幻のように消えるのか、
どうなるか、いや、何かあってはいけないのだが、

彼女たちが言うように、とにかく気持ちよかったのは
紛れもない事実だ。

何度も幾つもの光景が今も鮮烈に目に焼き付いている。

強烈な体験だった。一生忘れられない経験になったと思う…。

彼女たちの後ろ姿は美しく、
色気が増し増しになっていった…。



完